

第7回公開シンポジウム報告

本新学術領域研究の「第7回公開シンポジウム」が、平成24年3月13日（火）～14日（水）、春の日を感じさせる松山市（愛媛県）のメルパルク松山に於いて開催された。年度末にも関わらず109名の参加者が集い、活発な討論が繰り広げられた。

今回のシンポジウムでは、伊丹健一郎先生（名古屋大）の特別講演（1時間）を始め、研究項目A01-A04の研究代表者による8件（30分）の口頭発表と53件のポスター発表が行われた。口頭発表は、本領域の最終年度を控えた時期にふさわしく、いずれも高いレベルの研究報告を聴く事ができた。初日は赤阪健領域代表（筑波大）の開会挨拶の後、磯部寛之班員（東北大）、野口巧班員（名古屋大）、金原正幸班員（岡山大）の発表が行われた。人工核酸、光合成、機能性導電材料、各々の分野で、実用までを視野にした研究の展開が印象的であった。「分子触媒が拓くナノカーボンの合成化学」と題した伊丹先生の特別講演では、芳香族連結反応の反応開拓を基盤として、医薬合成からナノカーボン化学までの幅広い研究に圧倒された。講演の中心であったCPP・ナノグラフェンの精密合成化学からは「 π 空間の新しい可能性」がまさに「創発」されつつある。ポスター発表では31名の研究代表者による発表に22件もの応募発表を加え活発な討論が行われた。懇親会では評価グループの西郷和彦先生（高知工科大）から「30・40代の先生方も若い世代の育成を」とのお言葉に襟を正される思いであった。

二日目は柳和宏班員（首都大学東京）の「カーボンナノチューブの結晶化」、田代健太郎班員（物材機構）の「ペプチド合成を用いた金属錯体の配列制御」に関する研究報告の後、小林長夫班員（東北大）より「環拡大および環縮小フタロシアニンの合成と物性解明」、続いて安蘇芳雄班員（大阪大）から「分子エレクトロニクスのための π 共役機能分子の開発と評価」の研究が紹介された。前者には精緻な理論と実験に基づく物性の解析が、後者からは分子エレクトロニクスという応用志向の研究の中で、基礎となる分子設計の重要性が印象的であった。結びには赤阪領域代表から「金属・カーバイド内包フラーレン」に関する研究が報告された。フラーレン化学に疎い筆者には、同分野の最前線を学ぶ貴重な機会であった。最後に評価グループの北川禎三先生（兵庫県立大）から、本領域の終了以降の展開までを見据えた講評をいただいた。今回、筆者は古田弘幸班員の代理として参加したが、自身は「化学、創発」のキーワードを共有する別の学術領域に参画している。本シンポジウムを通して、含「 π 空間」分子群が「分子レベルの創発現象」を導く中心パーツであることを改めて認識させられた感がある。（文責 井川善也）

